

伊藤浩司*: エゾノユキヨモギについて

Koji Ito: On *Artemisia montana* Pamp. var.
shiretokoensis Ko. Ito

筆者の本植物への関心は1960年8月6日付、池田好郎氏採集の知床半島ウナキベツ座標本から始まる。この標本は全体白綿毛を被り、被毛の点ではシロヨモギをおもわせるものであった。しかし葉形や、蕾であったが頭花の形態、花序などから推してシロヨモギとは区別されるべきものであった。北大農学部標本庫所蔵の標本についてみるに、1951年7月、採集者不明の知床半島ルシヤ産“?ヒロハウラジロヨモギ”と鉛筆書きされた若い個体の標本は、明らかに池田氏採集のものと同一と思われた。その後筆者は1962年7月と1964年7月の2回知床岬植生調査のため同地で1週間程過ごす機会を得た。それによって本植物がかなりの範囲に生育していることを知り、また観察することができた。1962年の調査では、開花個体を得ることができなかったが、1964年7月の調査で生品を札幌に移植することに成功し、同年8月10日頃には札幌の天然生エゾヨモギに先立つことと約20日で開花した。翌年には猶入念に観察することができ、結局第1表に掲げた特徴は

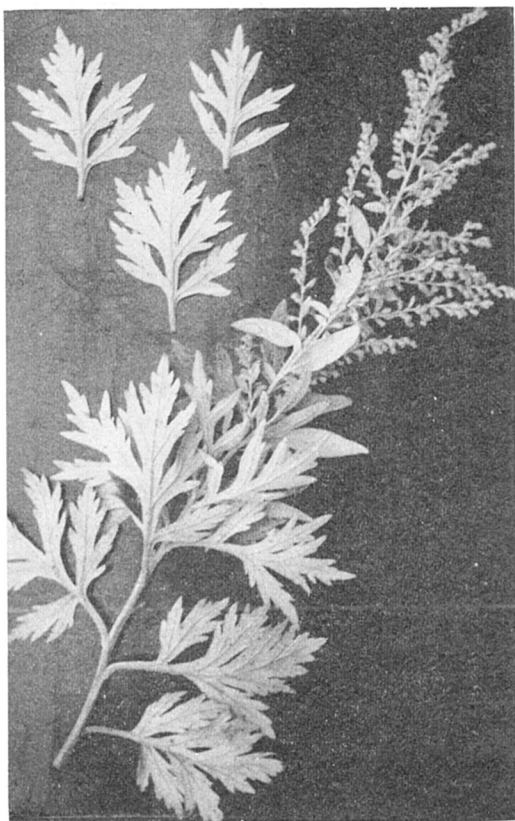


Fig. 1. *Artemisia montana* var. *shiretokoensis* Ko. Ito in full bloom, transplanted from Shiretokomisaki to Sapporo and cultivated (holotype—Aug. 20, 1964, Ko. Ito).

* 北海道大学農学部応用植物学教室. Botanical Institute, Faculty of Agriculture, Hokkaido University, Sapporo.



Fig. 2. *Artemisia montana* var. *shiretokoensis* in natural station in Shiretoko Pen. (Kitami side)—photo by M. Tohyama, Jul. 9, 1964.

安定した形質であることが判った。本植物は産地からみると、全体白綿毛が多い点でシロヨモギとの関係が考えられるが、シロヨモギに属さないものであることは既に述べた。つぎに比べ得る種類はヒロハウラジロヨモギである。ヒロハウラジロヨモギは i) 若時葉の両面に白色綿毛を被るが、上面の被毛は成葉になるにつれて薄れてゆき、またその色は本植物のような雪白というよりむしろ汚白色であること ii) 仮托葉をもつこと iii) 葉の切れ込みが一般に浅いこと iv) 頭花が大きいことなどで本植物から区別される。ヨモギ属の分類において、重要なきめ手の一つは頭花であるが、その形状、大きさ、小花の構成の面からみると、本植物はエゾヨモギと全く一致する。しかしエゾヨモギでは茎や葉の上面はほとんど無毛で緑色を呈し、葉の下面葉脈上には毛がないかあるいは薄いのが普通である。本植物では葉の上面に白綿毛を生じ、下面全体に雪白の綿毛を密生して葉脈まで被毛していることと、葉質が厚く、全体にヨモギ独特の芳香を欠く点で全く独特の性質をもっている。また葉の側裂片は幅広く、エゾヨモギより一層深く切れ込んでおり、しかも裂片の先端の形状はシロヨモギやヒロハウラジロヨモギの葉にみられるように、茎葉、包葉を問わず一般に鋭頭の傾向を有する (Fig. 1)。これに反し、エゾヨモギでは側裂片は一般に全辺または 2, 3 の小牙齒を有するのみで、裂片の先端は鋭尖頭を呈するのが普通である (エゾヨモギにも鋭頭の葉身や裂片をもつものもあるが、筆者の観察している限りでは一般的ではないようである)。最後に知床岬におけるヨモギ

属植物の生育分布状況の概略を述べると i) 海浜砂礫地や海岸断崖斜面にはシロヨモギ、また断崖斜面の岩上にはアサギリソウやイワヨモギ、海洋風を著しく受ける沿岸台地の辺縁部にはアサギリソウやサマニヨモギ、まれにハマオトコヨモギをみる。ii) 海岸台地の草原でオオハナウド、チシマアザミ、イワノガリヤス、ススキなどが優占あるいは優勢な群落に入ると、ヒロハウラジロヨモギ、オトコヨモギ、エゾヨモギが姿を現わし、殊に大規模なエゾヨモギ群落の発達をみるようになる。もっともエゾヨモギは時に海岸近くの人々（鮭鱒漁場、昆布採取小屋）の辺にも生育しているが、ヒロハウラジロヨモギやオトコヨモギは草原でも概して山寄りの地帯にみられる。本植物は丁度 i) と ii) の接触部あたりにみられる (Fig. 2)。すなわちシロヨモギほどは海岸前面にまで広がらず、エゾヨモギほどは草原内部にまで浸透していないのである。

和名エゾノユキヨモギは本州産のユキヨモギに準じたものである。ユキヨモギにおいては全体に雪白綿毛を被り、生育地が海岸であることを大きな特徴とし、かつ往々内陸産のカズザキヨモギとの混合形がみられるということは、知床岬におけるエゾノユキヨモギとエゾヨモギとの関係をも暗示しているようで、両者の関係については将来細胞学の見地から猶究明して行きたい。

エゾヨモギ×シロヨモギの可能性を考え、花粉の稔度を調べたが、異常な花粉粒は殆ん

第1表 エゾヨモギとエゾノユキヨモギとの比較

	エゾヨモギ	エゾノユキヨモギ
全 体	大形、茎は直立して 1.5—2 m に達し、基部は径 8 mm におよぶ。	小形、茎は高さ 0.4—1 m、基部は斜上し、径 3—5.5 mm。
芳 香	あり。	ほとんどなし。
茎・花序の枝の毛	一般に無毛またはくも毛少し。	雪白色くも糸状綿毛密生。
葉の毛	上面無毛、または少しくも糸状毛あり、緑色を呈す。下面白綿毛生ずれど脉上無毛。	上面くも糸状白綿毛やや密に生じ、白色を呈するが、果時に至って漸次脱落。下面雪白綿毛密生し、脉上まで被毛する。
葉 質	洋紙質。	厚質(厚さ前者の約 1.5—2 倍あり)。
花 期*	遅し (8月20日頃より開花)	早し (8月10日頃開花)
生 育 地	草地、林地、路傍	海岸草原、海岸附近

* 同一生育地(札幌)にての比較。

どなくてほぼ 100% 正常である。但し原産地では多数の独立した子株があるので結実も完全と思われるのに対し、札幌へ移植した株では未だ果実がならない。この点は更に検討を要するであろうが、今はエゾヨモギの変種としておきたい。

* * * *

Artemisia montana Pamp. var. **shiretokoensis** Ko. Ito, var. nov.

Herba vix aromatica. Rhizoma repens. Caulis e basi ascendente 3-5.5 mm in diametro erectus, 40-100 cm altus, dense niveo-arachnoideo-tomentosus cum inflorescentiis. Folia radicalia sub anthesi emarcida, folia caulina media ovata, ca. 5-11 cm longa, 5-7 cm lata, supra arachnoideo-tomentosa, in fructu glabrata, sub dense niveo-arachnoideo-tomentosa cum nervis, textura crassiuscula, profunde pinatisecta, laciniis 3-4-jugis, anguste oblongis vel oblongis, vel obovatis, apice plerumque acutis, interdum acuminatis, pinnatifidis vel inciso-dentatis. Folia superiora sursum gradatim minora, trifida vel integra, elliptica vel oblonga, vel oblongo-lanceolata. Inflorescentia racemoso-paniculata, 20-60 cm longa, 20-40 cm lata, multicephala, ramis ramisque in fructu valde ascendentibus, raro ramulis suberectis approximatis. Capitula 3-4 mm longa, 1.5-2 (-2.5) mm in diametro. Involucrum modeste arachnoideum, globoso-campanulatum vel campanulatum, squamae triseriales imbricatae, exteriores breviores, late ovatae acutae, dorso virides ceterum membranaceae, 1.5-2.5 mm longae, interiores oblongae apice rotundatae, 3 mm longae, dorso virides ceterum membranaceae. Receptaculum globosum nudum. Flos ♀ ca. 5-6, corolla 1.2 mm longa, sparse hispida. Flos ♂ ca. 6-10, corolla 2.4-3 mm longa, glanduloso-punctata, pars angusta tubi 1-1.2 mm longa. Antherae 0.8-1 mm longae anguste oblongae, basi bifidae acutae, filamenta superne dilatata. Styli rami apice truncati dilatati penicillati.—Fl. VIII.

A typo recedit planta minore vix aromatica, foliis crassiore supra arachnoideo-tomentosis subtus cum nervis dense niveo-araneo-tomentosis, et floribus praecociore.

Hab. Hokkaido: prov. Kitami; Shiretoko Penin. Shiretoko-misaki (Jul. 28, 1964, Ko. Ito & M. Tohyama)—this was transplanted and cultivated in Sapporo (Aug. 20, 1964, fl.—holotype in SAPA), do. (Jul. 27, 1962, Ko. Ito), Unakibetsu (Aug. 6, 1960, Y. Ikeda), Russha (Jul. 11, 1951, coll. ?).

The new variety differs from *A. montana* by the smaller size and little aromatic leaves thicker in texture and fairly densely cobwebby above. It is interesting that the present variety grows, in an average, in an intermediate zone between the maritime vegetation (containing *A. Stelleriana*) and the meadow vegetation on the terrace (containing mesophytic *A. montana*, *A. japonica* and *A. Koidzumii*). But *A. montana* var. *montana* intermingles with this variety near fishermen's lodges in the maritime vegetation by human agency.